

穏やかな秋晴れに誘われてか、ベビーカーを押す若夫婦や車椅子に乗った来場者が目立つ。場内は、懐かしいクルマが展示されているテーマ館に足を向ける中高年層、広場でピクニック気分の親子連れなど、様々な来場者で賑わう。実用化され身近になった超コンパクトEVも人気で、試乗コースは時間待ちの人々が長い列を作っていた。

“ 触れる展示 ” 小さなクルマにかける SUZUKI

「小さなクルマ、大きな未来。」をテーマに、環境への対応力、キビキビした走りといったスモールカーの夢を交えた発展性と魅力を提示。一方、広いフロアに市販車19台を並べ、“触れる展示”という実利性をショーの場で展開しているのもスズキのもう一つの顔だ。

メインステージには2人乗りの「Pu3-commuter」を中央に3台のコンセプトモデルを展示。16面の大型スクリーンによって小さなクルマにかけるスズキの企業姿勢を、夢を交えてアピールする。Pu3はパワーユニットをガソリンエンジン、ハイブリッド、モーターの3つから選択できる街乗り通勤車で、曲線を多用したデザインに女性の人気が集まる。このほかスタイリッシュな「MR-wagon」、提携先のGMが開発中のモーターユニットを搭載した「EV-sport」と、様々な可能性を示す。

技術説明員によると、このコンセプトカー3台のうち、スペックや発売時期など最も質問が多いのが「MR-wagon」という。フロントミッドシップで居住性も現行ワゴンRより一段上。反響が大きいだけに、超ロングセラーを続けるワゴンRの新バージョンとして、市場投入



3つのパワーユニットが選べる「Pu3- コミューター」

も意外と早いかもしれない。また、1リッターエンジンの参考出品車「ワゴンR+(プラス)スペシャル」も、ローダウンのスポーツ仕様に注目が集まっている。

こうした参考出品車の充実もさることながら、市販車に出来るだけ触れてもらおうという意図も強くうかがえる。10月に発売されたばかりの環境カー「アルト・エポ リーンバーン仕様」など、市販車は19台に及ぶ。同モデルは軽自動車初のアイドルストップ装置を搭載、1リッター当たり走行30キロと、トップの燃費性能を実現。さらに小型車では、7人乗りワンボックスの「エブリイワゴン+(プラス)」(1.3リッター)に乗ってみて、その居住空間に驚く来場者が多いとしており、1台でも多くの市販車に触れて、乗ってみて という作戦が成果を上げていたようだ。



ワゴンRの新バージョン「MR-ワゴン」

来場者に聞く

親切なガイドさんに感謝

膝のうえにカタログを重ね、熱心に見入っていた2人の女性。東京・渋谷区的首藤佳子(左)さんと東京・荒川区の片山和恵(右)さん。首藤さんは4年前から連続3回目のモーターショー。「二輪車を見に通っています。とても楽しい。二輪のレースも見に行きます。いま二輪車にのめり込んでいる。



一方の片山さん「スポーツカーに魅かれました。ただ人気のブースは混んでいてゆっくりみることができない」と不満気。

二人とも「ブースの方も、各館のガイドの人も親切に説明してくれるので、とても気持ちよくみることができました」と、こちらは及第点。「次回も来てみたいと思っています」。



万が一バッテリーが切れても走れる「EV-スポーツ」

スポーツムードで盛り上がるブース

日産との提携で日本での知名度が上がったルノーのブースは、スポーツムード一色だ。ルノーは、現在世界的に大流行しているモノフォルムデザインを、「モノスペース・コンセプト」という形で提案したメーカーとして知られる。今回はそれを発展させたラグジュアリーGTクーペを「アヴァンタイム」という形で提案している。Bピラーのない広いガラスエリアとキャビン、快適性、ドライビングの楽しさを両立した新しいコンセプトで、来年夏ごろに欧州で発売されるという。「こんな車、本当に発売されるのかな」「すごいね」と来場者の関心は高い。

カーマニアの興味は、80年代の「サンク・ターボ」以来のミッドシップ・ホットハッチ「ルーテシア ルノースポーツ

ルノー / アルピーヌ・ルノー



未来型モノフォルムGTクーペ「アヴァンタイム」(左)と、ホットハッチ「ルーテシア ルノースポーツV6 24V」(右) V6 24V」に尽きる。コンパクトなルーテシアのボディに3リットル / 24V エンジンを押したエキゾチックモンスターは、まさにルノースポーツの象徴として圧倒的な人気だ。

FFへのこだわりに興味津々



FWD・NAエンジンで4WDターボ勢に挑む「クサラ・キットカー」 かった。

シトロエン

独創的なFF車作りをしてきたシトロエンのブースは、「クサラ」と「エグザンティア」の二車種を中心に、若々しさに満ちたバリエーションを揃えている。クサラは3ドア、5ドア、ワゴン(ブレイクと呼ばれる)の三車種を展示。シトロエンファンだけでなく多くの来場者が訪れていた。

「C3」は、車体構造とデザインの全方位から、コンパクトカーの新しいコンセプトを提案したものだ。室内に等間隔に敷かれた4本のレールにより、どの位置にも座席を移動でき、多彩なインテリアアレンジが可能。上品なスタイリングと斬新なインテリア、その独創性は来場者に強い印象を与えたようだ。

一方、スポーツファン関心の的は、WRC連勝でラリー界に旋風を巻き起こしている「クサラ・キットカー」。「速そう」と覗き込む人が絶えな

エアロ仕様のヴィゲンが人気 サーブ

GMグループのサーブは、スウェーデンの会社である。その独特の操縦性能は、「はまったら抜けられない」(来場者の一人)と言われるほど奥深いという。イグニッションキーの独特な位置や、夜間ドライブ時にメーター類が煩わしくないようにスピードメーターを残してすべて消灯する「ナイトパネル」など、飛行機のコックピットを思わせる装備が多い。飛行機も作っている会社だからだろうか。スウェーデン語で『稲妻』を意味する「ヴィゲン」を付けた「9-3 ヴィゲン」は、エアロ仕様のスポーツバージョン。上品さとスポーティさが調和して、近い将来発売される予定の「9-5 エアロ」とともに関心は高い。また「9-3 エアロカブリオレ」も、「オープンカーなのに嫌味じゃないのがいい」と、若い人たちの関心が高かった。



高圧ターボ225ps仕様の「9-3 ヴィゲン」

トヨタブースに“異色作”

モーターショーも後半に入った29日、西ホールのトヨタブースにちょっと人目を引く車が展示された。実はこの車、トヨタのヴィッツをベースに、バイオニアとトヨタの子会社・トヨタモデリスタインターナショナル、それに雑貨品販売のバルスの3社が共同設計した“異色作”。

車体はパールホワイトと薄いライトグリーンのツートンカラー。内装は白が基調で、グリル周りなどに透明素材を使っている。女性に人気の雑貨ショップ、フランフランのデザイナーが室内をイメージして設計したとか。20歳代の女性を意識した車。ぜひ成功させたい。担当者は意欲的だった。



29日の入場者数
84,900人
入場者数累計 710,900人

Topics (第8回) メッセからFM生放送

西ホールと中央ホールの間やすらぎのモールで、BAY-FMとTOKYO FMがサテライトスタジオを開設して、モーターショーの様子を伝えている。TOKYO FMは今月いっぱい、BAY-FMは11月2日まで放送の予定。

BAY-FMは平日、午前10時30分と午後2時15分の2回、ここから情報を流す。午後は各ブースから女性説明員などを選んで話を聞いている。29日は午前8時半から正午まで生放送。この日はモータージャーナリストの熊倉重春さんがゲスト。30日の土曜日は午前11時から正午まで生放送。ゲストはレーシングドライバの織戸学さん。

一方のTOKYO FMは29日正午から午後4時まで生放送。パーソナリティは小田静枝さんだった。また30日は午前10時から10時50分までサテライトスタジオから放送する。来場者も放送が始まるとサテライト前に集まり、会場で放送を楽しんでいる。

